『言語情報学研究報告』No.4（2004）

フィリピノ語

森口恒一
（静岡大学教授）

1. フィリピノ（タガログ）語の使用地域と人口

フィリピノ語は，憲法で定められた言語で，マニラ近郊の言語であるタガログ語が基本となっている。タガログ語は，マニラを中心として，北はヌエヴァ・エシハ州，南はミンドロ島，東は北カマリネス州，西はルバング島で使われる。1970 年の統計では母語使用者としては，800-900 万人であるが，この言語を使うと言われている人は，2000 万人である。

80 以上あると言われているフィリピンの言語の中で，母語の使用者が最も多い言語は，かつては，南のミンダナオ，セブー地域で使われていたセブアノ語であったが，政治的な背景と学校教育の進展でフィリピノ（タガログ）語人口が増化している。

参考文献

Frei, E.J. (1959) : *The Historical Development of the Philippine National Language.* Institute of National Language.

Institute of National Language (1971) : *General Information on the Pilipino Language.* Institute of National Language.

Liamzon, T.A. (1978) : *Handbook of Philipine Language Groups.* UNESCO.

2. フィリピノ（タガログ）語の規範・方言概略

2.1 フィリピノ（タガログ）語の規範

フィリピノ(タガログ)語の特徴として，他のオーストロネシア語族の西語群(Hesperonesian)，フィリピン・台湾諸語と同様に接辞とそれに伴う変化，そして，品詞変化が基本変化で，辞書が非常に重要である。記述的な文法書は，1800 年代からあるが，基本文法というものは，現在のところは無く，基本となる文法書は，すべて記述的な観点から書かれたものである。

参考文献

Blake, F.R. (1925) : *A Grammar of the Tagalog Language, the Chief Native Idiom of the Philippine Islands.* American Oriental Society

Bloomfield, L (1917) : *Tagalog Texts with Grammatical Analysis.* University of Illinois, Urbana.

Bowen, J. D. (1965) : *Beginning Tagalog.* University of California Press.

Lopez, C. (1941) : *A Manual of the Philippine National Language.* Institute of National Language
Schachter, P & F. Otanes (1972) : *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press.

2.2 タガログ語の方言

タガログ語は，マニラを中心として，北はヌエヴァ・エシハ州，南はミンドロ島，東は北カマリネス州，西はルバング島で使われる。方言は大きくマニラ・タガログ(Manila Tagalog)，ブラカン・タガログ(Bulakan Tagalog)，バタンガス・タガログ(Batangas Tagalog)，バタアン・タガログ(BataanTagalog)，タヤバス・タガログ（Tayabas Tagalog)，マリンドゥーケ・タガログ(Marinduque Tagalog)(Boak)等の方言がある。また，タガログ語の中で，古い形を残しているのがマニラの北に隣接するブラカンのタガログ語であり，一般に Deep Tagalog と呼ばれている。この方言は，かつては，マニラ地域の方言とおなじであったが，マニラの都市化と，借用語と英語・スペイン語のマルチ・リンガルのためにこの地域のタガログ語は新しい形として変化して行き，少し侮蔑的に Tagalish とか Englog とも呼ばれ，農村地帯のブラカンで古いタガログが保存されている。

参考文献

Liamzon, T.A. (1978) : *Handbook of Philipine Language Groups.* UNESCO.
Lopez (1970) : "On the Boak Tagalog of the Island of Marinduque." In *The Archive.* University of the Philippines.
Manuel, E.A. (1971) : *A Lexicographic Study of Tayabas Tagalog.* The Diliman Review: University of the Philippines.

3. フィリピノ（タガログ）語の文字と発音

A	a	**[a]**	NG	ng	**[ŋa]**
B	b	**[ba]**	O	o	**[o]**
K	k	**[ka]**	P	p	**[pa]**
D	d	**[da]**	R	r	**[řa]**
E	e	**[e]**	S	s	**[sa]**
G	g	**[ga]**	T	t	**[ta]**
H	h	**[ha]**	U	u	**[u]**
I	i	**[i]**	W	w	**[wa]**
L	l	**[la]**	Y	y	**[ya]**
M	m	**[ma]**			
N	n	**[na]**			

この他に，正書法では3種のアクセント・マーク(^, ˋ, ˊ)があり，それらは，声門閉鎖音(Glottal Stop)とアクセントの両方を示している。一般に，教育の場ではこの記号を使うが，フィリピノ（タガログ）語を書くときには，このアクセント・マークを省略する。

aso	（犬）	aso(—・—)
asó	（煙）	aso(˘ ・—)
babà	（顎）	baba? (—・—)
babâ	（下降）	baba? (˘ ・—)

また，語中の声門閉鎖音は，母音連続の場合には表示せず，その他の場合にはハイフン（—）を用いる。

daan	**/da?an/**	（道）
mag-inom	**/mag?inom/**	（飲む）

参考文献

森口恒一（1977）「タガログ語のアクセントに関する覚え書き — 物理アクセントと心理アクセント」,『東南アジア研究』.Vol. 15. No. 1. pp. 79-94.
森口恒一（1985）『ピリピノ語（タガログ語）文法』.大学書林.
Schachter, P & F. Otanes (1972) : *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press.
Yap, F.A. (1970) : *The Sounds of Pilipino --- A Descriptive Analysis.*

4. フィリピノ（タガログ）語の音節

タガログ語は，拍(Mora)単位が重要ではなく，音節(Syllable)が重要である。すなわち音節が原則的に一定の長さを持つ一定音節長言語(Syllable Timed Language)で，この原則的な一定の音節の長さが短くなることにより，意味の区別を生じさせる。また，この長さは，単語でも，句でも，文章の中でも，変化をする。

bahay	（家）	ba・hay (—・—)
bahayán	（住宅地）	ba・hay・an (˘・ ˘ ・—)
gamót	（薬）	ga・mot (˘ ・—)
gamutín	（薬で治す）	ga・mu・tin (˘・ ˘ ・—)

フィリピノ（タガログ）語の音節は，母音を核として，前後に子音を伴うことが可能である。この場合，母音で終わる音節を開音節(Open Syllable)，子音で終わる閉音節(Closed Syllable)の２種類があり，この両者の音響的な長さが重要である。

labá	**/laba/**	la・ba	(˘・—)	（洗う）
labâ	**/laba?/**	la・ba?	(˘ ・—)	（増大）
habá	**/haba/**		ha・ba	（長さ）
habág	**/habag/**	[habag°]	ha・bag	（同情）

参考文献

森口恒一(1977)「タガログ語のアクセントに関する覚え書き — 物理アクセントと心理アクセント」,『東南アジア研究』.Vol. 15. No. 1. pp. 79-94.
森口恒一(1985)『ピリピノ語(タガログ語)文法』.大学書林.
Schachter, P & F. Otanes (1972) : *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press.
Yap, F.A. (1970) : *The Sounds of Pilipino --- A Descriptive Analysis.*

5. フィリピノ（タガログ）語の母音と子音

5.1 母音

5.1.1 母音体系概略

フィリピノ（タガログ）語では，以下のように/a, e, i, o, u/の５つの音素が抽出される。ただ，これは，外来語や借用語の音を保ったために音素として取り扱われるものを含み，独自の音素の数は，/u, o, a/の３つである。/a/を中心として前に一つの非円唇前舌母音/i/と円唇口舌母音/u/がある。

・ 借用，外来語を含まない場合

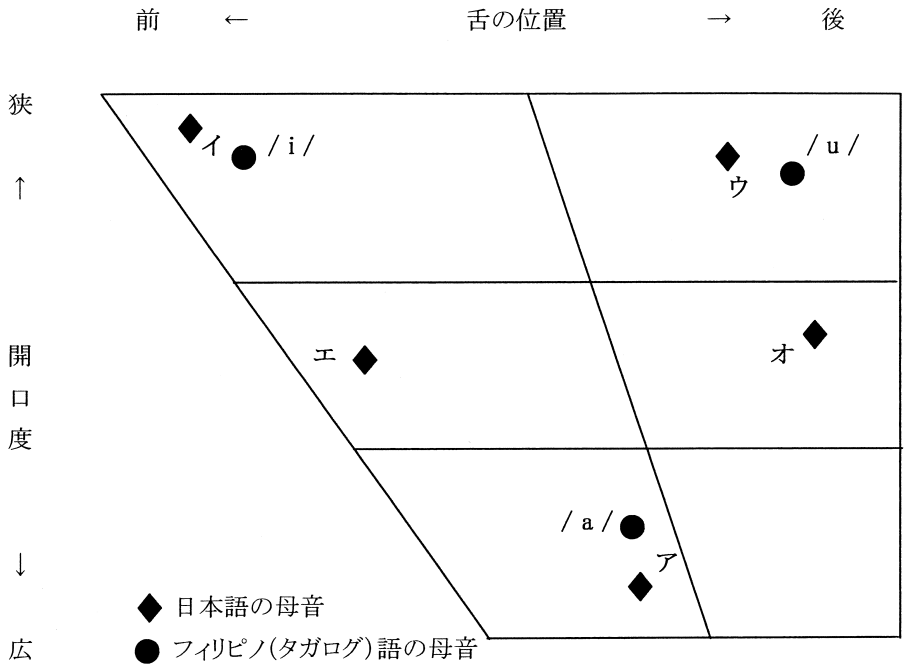
ubos（食べ尽くす）　　ubusin（食べ尽くしなさい）
sige.（それなら）　　sigi na　nga.（わかった）

・ 借用語・外来語を含む場合

poto(grapi)　（写真）　　puto　（餅）
mesa　　（テーブル）　　misa　　（ミサ）

5.1.2 母音音素目録

音素	音声とその環境	用例
/ **a** /	[**a**]	aga ‘早さ’
/ **i** /	[**i**] __ #, ___ʔ 以外 [**e**] __ #, ___ʔ	sigi na. ‘わかった。’ sige ! **[sige#]** ‘さあ’
/ **u** /	[**u**] __ #, ___ʔ 以外 [**o**] __ #, ___ʔ	puto ‘餅’ doon **[doʔon]** ‘そこ’



5.1.3 母音体系の特徴についての記述

フィリピノ(タガログ)語使用者は，単一言語使用者は，ほとんどおらず，少なくとも他のフィリピン諸語や英語などとの言語との多重言語使用者が全員であると言っても良い。そのために外来語が多く，それらを母語の音素体系に合わせず，音をもそのまま借用するために，外来語・借用語を含むか否かよって音素の数が異なる。特に，英語，スペイン語，中国語などの借用でよく見られる。

5.2. 子音

5.2.1 子音体系概略

これも，母音と同じで，独自の音素体系と外来語・借用語を含めた体系とで，その音素数に差がある。

・ 借用語・外来語を含まない音素

15 （**p t k; ʔ; b d g; s; m n ŋ ; h; l; w y**）

子音音素としては，15 ある。その中で多数の異音を持つものは，**/d/**である。
母音間では，音素**/d/**は，すべて**[ř]**になる。また，語頭の**/d/**は，/ **i** /の前に来る場合には，破擦音**[dʒ]**になる。それゆえに，これ以外の場所で見られる**[ř]**は，すべて外来語・借用語である。

/d/ 母音 —**/d/ [ř]** —母音,
/di/ # — **/d/ [dʒ]**—/ **i** /

また，破裂音は，語末と破裂音の前に来た場合には，非破裂音(Applosive)になる。

/p, t, k; b,d,g/ → **[pˀ tˀ kˀ ; bˀ dˀ gˀ]** — or #
Plosive

・ 借用語・外来語を含む音素

20 （**p t k; ʔ; b d g; f s z dʒ; m n ŋ ɲ; h; l ř; w j**）

/f/と**/z/**の音素は，外来語・借用語を含まない元々の音素**/p/**，**/s/**に変換される場合もある。それゆえ， 外来語の音をそのまま使う場合とタガログ的に変える場合がある。

/f/： **/f/** → **/p/** fangdango ～ pandango
[fandaŋgo ～ **pandaŋgo]** ‘ファンダンゴ（踊り）’
/z/： **/z/** → **/s/** zero ～ sero
［**zeřo** ～ **seřo**］ ‘ゼロ’
/dʒ/： /i/の前以外に来るこの音素は，すべて外来語である。
/ř/： 語頭・語末に来る**/ř/**は，外来語・借用語である。
/ɲ/： / **i** /の前以外の母音の前に来るこの音素は外来語・借用語である。

5.2.2 子音音素目録

・ 借用語・外来語を含まない音素

音素	音声とその環境	用例
破裂音 / **p** /	[**p**] _____ #以外 [**pˀ**] _____ #, _____破裂音	ipon [**ʔipon**] ‘収集’ talop[**talopˀ**] ‘剥離’
/ **t** /	[**t**] _____ # [**tˀ**] _____ #, _____破裂音	dala[**dala**] ‘網’ bukót[**bukotˀ**]‘背虫’
/ **k** /	[**k**] _____ # [**kˀ**] _____#, _____破裂音	baka[**baka**] ‘牛’ danak[**danakˀ**]‘出血’
/ **ʔ** /	[**ʔ**]	daan[**daʔan**]‘道’ mag-inom[**magˀ ʔinom**] ‘飲む’ aso[**ʔaso**]‘犬’
/ **b** /	[**b**] _____ # [**bˀ**] _____ #, _____破裂音	ambón[**ʔambon**]‘こぬか雨’ tabtab[**ta bˀ ta bˀ**]‘剪定’
/ **d** /	[**d**] [**dˀ**] _____ #, _____破裂音 [**ř**] V____V [**dʒ**] #____i	dahak[**dahakˀ**]‘たんを吐く’ hubad[**hubadˀ**]‘裸’ paraan(pa+daan)[**pařaʔan**]‘通り過ぎる’ diyan[**dʒijan**] ‘そこ’
/ **g** /	[**g**] [**gˀ**] _____ #, _____破裂音	gunting[**guntiŋ**]‘鋏’ kabag[**kabagˀ**]‘鼓腸’
摩擦音 / **s** /	[**s**]	sayá[**saja**]‘ほがらか’
/ **h** /	[**h**]	hamak[**hamakˀ**]‘軽侮’
鼻音 / **m** /	[**m**]	sama[**sama**]‘同伴者’
/ **n** /	[**n**] [**ɲ**] i ___ , _____ i	banál[**balal**]‘敬虔な’ inyo[**ʔiɲo**]‘あなたに’
/**ŋ** /	[**ŋ**]	ngawâ[**ŋawaʔ**]‘顎の動き’
側面接近音 / **l** /	[**l**]	balát[**balatˀ**]‘皮膚
接近音 /**w** / /**j** /	[**w**] [**j**]	tawa[**tawa**]‘笑い’ yarí[**jařiʔ**]‘出来事’

借用語・外来語を含む音素（共通部分は省略）

摩擦音：

f　　**[f]**　fangdango　～　pandango

[fandaŋgo　～　pandaŋgo]‘ファンダンゴ（踊り）’

z　　[**z**]　zero　ー　sero［**zeřo**～　**seřo**］‘ゼロ’

鼻音：

ny/ñ　　**[ɲ]**　senyor　**[seɲor]**‘ミスター’

はじき音：

r　　[**ř**]　radyo[**řadʒio**]‘ラジオ’

破擦音：

j　　**[dʒ]**　jeep[**dʒiːp**]‘ジープ

	両唇	唇歯	歯 歯茎 後部歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	喉頭	声門
破裂音	**p b**		**t d**		**(dʒ)**	**k g**			**ʔ**
鼻音	**m**		**n**		**(ɲ)**	**ŋ**			
ふるえ音									
はじき音			**(ř)**						
摩擦音		**f**	**s (z)　ʃ**						**h**
側面摩擦音									
接近音	**w**				**j**				
側面接近音			**l**						

	有声唇軟口蓋
接近音	**w**

5.2.3 子音体系の特徴についての記述

フィリピノ(タガログ)語使用者は，単一言語使用者は，ほとんどおらず，少なくとも英語などの言語との多重言語使用者である。そのために外来語が多く，それを母語の音素体系に合わせず，音をも借用して，音素の数が外来語・借用語を含めるか否かによって異なる。特に，英語，スペイン語，中国語などの借用がよく見られる。

参考文献

森口恒一（1985）『ピリピノ語(タガログ語)文法』.大学書林.

Schachter, P & F. Otanes (1972) : *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press.

Yap, F.A. (1970) : *The Sounds of Pilipino --- A Descriptive Analysis.*

6. フィリピノ（タガログ）語のプロソディー：アクセント・リズム・イントネーション

フィリピノ（タガログ）語のアクセントは，基本的には3要素の高さ・強さ・長さの複合的なものに基づく聞こえであるが，その中で最も重要な要素は，音節の長さ（短さ）である。一般的には，一定音節長言語(Syllable Timed Language)であるが，その一定の長さを半分の長さにする事により意味の区別を行うものである。

6.1 アクセントの位置

アクセントは，単語の場合，後ろから２音節目の長短により対立を示すが，句，文章の中に入った場合には，全体をまとめた規則があり，変化をする。

aso　**[ʔa:so:]** (—・—)　‘犬’
asó　[**ʔaso:**] (˘ ・—)　‘煙’

buhay　（生活，命）　bu・hay　(—・—)
kabuhayan　（生活の糧）　ka・bu・hay・an (˘・ ˘・— ・ —)

gamót　（薬）　ga・mot　(˘ ・—)
gamutín　（薬で治す）　ga・mu・tin (˘ ・˘ ・—)

6.2 イントネーション

6.2.1 イントネーションを表す音声的要素

イントネーションは，文単位で起こる，主に音の高さの変化に与えられた用語で，文単位の抑揚，ピッチ変化と言って良い。そして，その音の高さの変化は，句単位，文単位の構成グループでのまとまった規則性を示している。

・ 漸次下降型
　Pumarito ka.　‘ここへ来い。“
　Sino ka ba?　‘あなた，誰？’

・ 文末の音節の下降
　Akin ang tinapay.　‘このパンは，わたしのです。’

・ 文末の音節の上昇
　Akin ba ang tinapay?　‘このパン，私のですか。’

・ 最後の句の上昇

Tayo ba? ‘我々？’

Tayo na! ‘行こう！’

・ 最後の一つ前の句の上昇と最後の句の下降

Maganda ito, ano? ‘これ綺麗でしょう？’

参考文献

森口恒一(1977)「タガログ語のアクセントに関する覚え書き — 物理アクセントと心理アクセント」,『東南アジア研究』.Vol. 15. No. 1.pp. 79-94.

Schachter, P & F. Otanes (1972) : *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press.

7. フィリピノ（タガログ）語音声の多様性

7.1 前鼻音化

フィリピノ（タガログ）語では，他の語彙との融合で不規則動詞が出来上がった英語と違い，不規則動詞と思われるものもすべて同化等の音変化の規則で説明がつく。その中で重要なものが前鼻音化(Prenasalization)である。これは，音変化だけの問題ではなく，形態音韻論(Morpho-phonemics)の問題で，文法と深く関わっている。

この現象が見られるの接頭辞の mang-, pang-など場合で，これら接頭辞の接辞末音の ng[ŋ]とそれに続く語根の初頭の音が融合して，鼻音化したり，後ろに続く音の影響で，同じ調音点の鼻音に変化する規則をいう。

Ⓐ ２音が融合する場合

		p	mang +pilì	→	mamilì	‘選ぶ’
-ng	+	b → m	mang+bilí	→	mamilí	‘買う’
		m	mang+miting	→mamiting	‘ミーティングする’	
		t	mang+takot	→	manakot	‘こわがらせる’
		d	mang +durâ	→	manurâ	‘面倒をかける’
-ng	+	→ n				
		n	mang+noód	→	manoód	‘鑑賞する
		s	mang+sakít	→	manakít	‘傷つける’
		k	mang + kailangan	→	mangailangan	‘必要になる’
-ng	+	→ ng				
		ng	mang + nganib	→	manganib	‘危険に陥る’

Ⓑ ng[ŋ]が，別の鼻音に変化する場合

		b → -mb-	mang- + biro	→	mambirò	‘冗談を言う’
-ng	+	d → -nd-	mang- + dukot	→	mandukot	‘財布をとる’
		l → -nl-	mang- + ligaw	→	manligaw	‘求婚する’

7.2 文末，語末の母音(a，e)の付加

会話の中では，文末に，特に子音で終わる場合には，a とか e を付加する。

Kulang pera ko, e. ‘金が足りないんだよ。’
Hindi na sila nakatira doon, a. ‘でも，あいつらそこに住んでいないんだよ。’

7.3 二重母音 ai が ei になる

会話対では，ai が ei/e になる。

/may/ **[mei]** ‘ある，いる’
/mayroon/ **[me(i)ro(o)n]** ‘ある，いる’

/kay/ **[kei]** ‘--- に’

7.4 音素体系の 2 重化 母語体系と借用語・外来語包含体系

音素の体系表で示したように，「意味を区別する音の最小単位」を音素とした場合外来語・借用語により新たな単語の導入と共に，意味を区別するために「意味を区別するための最小単位ではない音声」が，音素化した。そのために，音素体系としては独自のものと外来語・借用語をも含めた体系とに分けなければいけない。

参考文献

森口恒一 (1985)『ピリピノ語(タガログ語)文法』.大学書林.
Schachter, P & F. Otanes (1972) *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press.